

第8講 ペルシア戦争の原型としてのイオニアの反乱

レポート講評

アケメネス朝ペルシアの概説的な説明に終わっているレポートが10%ほどある。ダリウスや帝国を20の州に分けたこと、各州には長官（総督）が置かれ、税を徴収したこと、また王の目・王の耳によって州長官を監視させたこと、首都のスーサまで「王の道」という帝国街道を建設したこと、ペルシア戦争を引き起こして敗れたことなどに言及している。

問題はペルシアが征服した小アジア支配について問うているので、この設問の意図に全く合致していないと評さざるを得ない。

次にキューロスからダレイオスまでのペルシアによる小アジア支配とイオニアの状況について言及しているレポートが数多く見られた。初期の征服、支配の安定化と共にギリシア人有力者を僭主に登用し、さらにはヒスティアイオスのように王の側近にまで引き立てるケースのあったことが言及されていた。しかしそれは政治的抑圧を伴うものではあり、経済政策とは乖離するものであったと評価している。経済的にはオリエントの市場からギリシア人商人を排除することはなく、ナウクラティスに見られる考古学上の断絶もギリシア人居住地のメンフィスへの移動によって説明され得ると30%ほどのレポートが述べている。抑圧的であったのかそうでなかったのかは意見の分かれるところである。この時期のミレトスを「イオニアの華」と形容するヘロドトスの言葉からペルシア支配を肯定的に捉えるレポートと、民族支配である以上、ペルシアの支配は抑圧であると評するレポートとに分かれる。

問題はこれらの評価をめぐる研究史への言及がなかったことである。

次に抑圧説と非抑圧説の解説を行うレポートがある。これも相当数の人がこの研究史に言及していた。40%ほどのレポートがレンシャウやオズウィン・マリーの抑圧説、それに反論するバルサーやペリクレス・ジョージスの非抑圧説を取り上げて説明している。ペルシアがフェニキア人を厚遇してイオニア人の経済活動を抑制し、貢税徴収とトラキアの銀鉱山地帯の併合を通してギリシア世界での貨幣経済に打撃を及ぼしたという抑圧説の要点をまず指摘している。次いでペルシアはイオニア人の経済活動を抑制してお

らず、また貨幣の銀地金そのものの供給も決して減少していなかったという非抑圧説の反論もそれぞれバランスを取って紹介している。

問題は抑圧説と非抑圧説の紹介に留まってしまっている点にある。大事なことはそのような先行研究の状況の中でどのように自分の考えを展開していくのかがこのレポートでは求められている。

前 6 世紀中ごろにペルシアがリュディア王国を滅ぼし、その従属地域であったイオニア地方を含む小アジア西岸地域を武力制圧して以降ダレイオス時代までの小アジアにおけるペルシアの支配の歴史を概観し、その中でペルシアによる小アジア支配をどのように評価するのかという方向に問題を設定していくレポートがこれまた相当数あった。その際、ペルシアの小アジア支配を否定的に捉える見方と、肯定的に捉える見方の両方の特徴と根拠を示し、そのうえでペルシア時代のイオニア社会について触れ、既存の支配機構と階層構造をできるだけ温存しようとしたとか、銀地金の供給を増大させながらギリシア世界の貨幣経済を支えていたとか、ギリシア産品への市場は提供し続けたとかといった論証を 10%ほどのレポートが試みている。

イオニアの反乱に見られるギリシア諸都市の行動パターン

団結と分裂

海戦が決定的：ラデの海戦とサラミスの海戦

ダレイオスのスキュティア遠征

前 513 年頃 バルカン半島を北上し、時計回りに黒海沿岸を迂回

ヒスティアイオスらイオニアの僭主、後方残置

イストロス（ダニューブ）河の船橋守備

攻勢の終末とスキタイ人の反撃

ヒスティアイオスとミルティアデス

ミルティアデスの主張は後にアテナイで僭主支配に関する裁判

の折に捏造された可能性がある

ヒスティアイオス、ダレイオスの側近としてスーサへ

ミレトスの僭主はアリスタゴラスへ

サルディスの総督アルタフェルネスとの個人的関係

信頼の獲得

前 499 年 ナクソスの内訌

敗れた党派のものがアリスタゴラスに支援を求める

エーゲ海東部における人的ネットワークの存在

威信と影響力拡大の好機

アルタフェルネスの承認と協力を要請

遠征の大規模化と長期化

スキュラクス事件をめぐるペルシア人指揮官とのトラブル

遠征の失敗と遠征費用の返済問題

アルタフェルネスとの個人的信頼関係の喪失と借財の重圧

ヒスティアイオスからの反乱示唆（フォークテールの類か？）

ミレトスの支持者たちとの協議

僭主支配の社会的基盤の広がりを示す

艦隊に残留していた僭主たちの逮捕と処罰

コエスを除いて、僭主たちを逃す

国内に広がる僭主派の勢力

ペルシアとのパイプを残しておくことによって外交的手段の確保

イオニア人単独での行動への躊躇い

イオニア人の戦闘能力に対する低評価（ドーリス系ポリス出身のヘロドトスの偏見か？）

パン・イオニオンでの集会